

新年の御挨拶

国病久原会 副会長 中原賢一（恵寿病院院長）

皆様新年おめでとうございます。

昨年は相変わらずコロナに振り回された一年でした。長崎医療センターではこれまで多くのコロナ症例を治療され、スタッフの皆様は大変苦勞をされてきたと思います。伝統的に長崎医療センターは災害に先頭をきって立ち向かうという魂が宿っていますので、今後も積極的に活動し、社会貢献に努めていただきたく思います。最近新しい変異株も出てきていますが、ワクチンのみならず、抗体や経口薬など、新たな治療法も開発されつつあり、希望が持てるようになってきました。コロナが早く終息することを信じて、私たちも仕事をしたいと思います。

話は変わりますが、私の長崎医療センター前の勤務地は、東京都板橋区にある老人医療センターという都立病院でした。老人医療センターの歴史を遡ると元は江戸時代の貧困な子供たちの収容施設で、明治5年に養育院として浮浪者収容施設となりました。施設の院長として、今年の大河ドラマの渋沢栄一が、明治6年から死去する昭和6年まで務めました。養育院附属病院は最初は小さな診療所でしたが、昭和47年、美濃部都知事の時に、将来の高齢社会に備えることを目的とし、福祉、医療、研究の三位一体総合施設として、65才以上が入院条件の養育院附属病院、老人総合研究所、および老人ホーム（特養や老人ホーム）を備えた、大きなキャンパスをもつ総合施設として作り変えられ、新たに出発しました。

病院では東京大学、京都大学、金沢大学などからの先生が中心となり、全国から集まった若手の教育をおこなっていました。私も昭和55年、入局2年目に上京し、研鑽を積むことができました。現在の江崎院長も同じく養育院附属病院で研修されました。養育院附属病院には独特の文化・伝統・歴史があり、中で活動する先生方はそれを大事に守り、愛していると感じていました。

私が長崎医療センターに赴任したのは20年ほど前で、それから10年間長崎医療センターにお世話になりました。長崎医療センターに勤務して感じたのは、老人医療センターと同様に独自性と伝統を持ち、皆さんがそれを誇りにしていることでした。病院の生い立ちは異なりますが、大学から離れて独自の活動を行う組織であり、病院同士の共通性を強く意識させられました。この伝統に惹きつけられて勤務する先生方が多いのも長崎医療センターの特徴だと思います。

今後もこの長崎医療センターのアイデンティティーを大事に維持していただきたいと強く願っています。今年もよろしく願いいたします。